農業経済学科「国際開発経済論研究室」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学農学部 公開日: 2009-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池上, 彰英 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/5507

明治大学農学部研究報告　第141号（2005）39～40

〔研究室紹介〕

農業経済学科「国際開発経済論研究室」
International Development Economics

池　上　彰　英

経済のグローバル化が進むなかで，わが国と開発途上国とくにアジア諸国との経済的なつながりはいよいよ強くなっています。開発途上国の社会経済問題に対する関心もますます深まり，開発途上国の経済発展のためにわが国がいかなる貢献を果たしうるのかが厳しく問われています。一部の開発途上国はいまだに食料不足に直面しており，すべての開発途上国が貧困問題（絶対的な貧困問題もしくは地域間格差や階層間格差といった相対的な貧困問題）を解決できずにいると言っても過言ではありません。開発途上国における食料問題については言うまでもなく，農産物価格の低位性や農村過剰人口との関わりの深い貧困問題についても，農業経済学の重要な研究課題となっています。

以上のような時代的要請ならびに研究需要の高まりに応えるために，2001年に新設されたのが「国際開発経済論研究室」です。担当教員の主要な研究課題は中国の食料・農業問題や農業政策ですが，研究室の学習・研究テーマはもう少し広く，東アジアや東南アジア各国の経済発展や経済政策について多角的な切り口から取り上げています。また，アジアの農業について考える際には，人口稠密なアジア農業と土地が豊富な新大陸農業との比較，途上国の農業搾取政策と先進国の農業保護政策との比較という視点を大事にしています。なお，毎年3年次の学生を対象に中国における農村調査実習（写真1～2参照）を実施していますが，中国全体では最も豊かな部類に属する北京近郊の農村を訪れた学生が北京市内との大きな経済格差にショックを受けるのを見て，中国における経済格差問題の深刻さをあらためて痛感させられます。

写真1：中国農業科学院農業経済研究所での授業風景

卒業論文のテーマについては，できる限りゼミ生の自主性を重んじる方針をとっており，卒業生の多くが民間企業や農業団体に就職すること

から，自分の進む業界に関係の深い研究テーマを設定することも奨励しています。もっとも，結果的には開発途上国の経済や農業に関連するテーマで卒論を執筆するゼミ生が多く，そのなかには実際に現地調査を実施して作成した「タイの経済発展と農村の変化」（図1参照）や，「ラオスの経済発展の行方」，「中国チェーン小売業の発展」などユニークで優れた論文が多数あります。

写真2：北京近郊での「日光温室」（冬の北風を遮るために北側が土壁になっている）を利用した野菜栽培

ゼミは今のところ学生の人気も比較的高く，毎年15名前後が入室しております。開発問題や国際協力に関心の強い学生が多く入室していることもあり，卒業生のなかからは英国 Reading 大学の Political and International Studies の大学院に進学するものや青年海外協力隊員としてフィジーに赴任するもの，大学院進学後 JICA のインターンとしてエチオピアに派遣されるものなどが現れており，アジアをテリトリーとする教員の活動範囲をはるかに超えてグローバルに羽ばたいています。

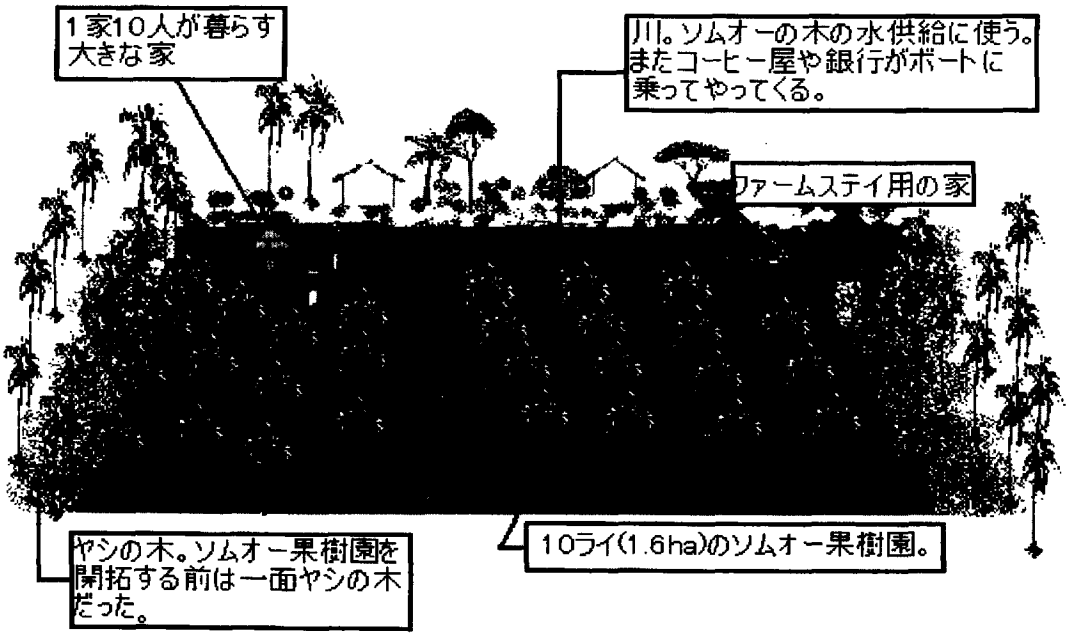

図1　バンコク郊外のソムオー（ザボン）農家の様子
（安藤秋の卒業論文より引用）